

# 鬼ごっこ場面における客観的評価尺度を用いた 幼児の身体活動と運動能力

郷家史芸<sup>1</sup>，松延毅<sup>2</sup>，松延摩也子<sup>2</sup>，石田淳也<sup>3</sup>，本田由衣<sup>4</sup>，藤田清澄<sup>5</sup>，香曾我部琢<sup>6</sup>

<sup>1</sup>宮城教育大学大学院生活系教育専修，<sup>2</sup>社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園，

<sup>3</sup>メリーポピンズ朝霞台，<sup>4</sup>武蔵野短期大学，<sup>5</sup>盛岡大学，<sup>6</sup>宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

本研究では幼児のおにごっこ場面における幼児の走動作をサンプリングする。そしてその映像データを中村ら（2011）の観察的評価法と鈴木ら（2005）による子どもアクティビティ尺度を用いて分析を行うことで幼児の運動能力を評価し、幼児が持つ運動能力がおにごっこ遊びの場面でのどのように身体活動として現れるのかを明らかにすることを目的とする。

キーワード：幼児、おにごっこ、身体活動、運動能力、評価尺度

## 1. 問題と目的

### 1.1 おにごっこによる子どもの発達

おにごっこによる幼児の発達について富田（2015）[1]は、おにごっこ・ルール遊びを行う中で、(1)「社会性」「協調性」「友達と助け合おうとする力」などの【社会的発達】、(2)「考える力」「判断力」「予測力」などの【知的発達】、(3)「友達と遊ぶことの楽しさを味わう」「協力する楽しさを身につける」などの【情緒的発達】、(4)「瞬発力」「俊敏性」「脚力」などの【身体的発達】の4つの発達の意味合いがあることを明らかにした。この結果からおにごっこは「非認知的」な力の育みのほか、幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿で挙げられているような健やかな心と体の育みにも関連する遊びであると考えられる。

また、おにごっこによる人間関係の発達について田中（2005）[2]はおにごっこの実践を年齢別に行い、その集団性に着目し、幼児がおにごっこ中も集団を意識する過程の検討を行った。この結果からおにごっこをしている中で幼児は、仲間との距離感や自らの役割意識、追いかけ方や逃げ方などに発達の違いが存在していることが明らかとなった。この結果から、運動能力や身体活動にお

いても差異が生じていると考えることができる。

おにごっこによる幼児の発達に関する研究として、ほかにも田丸（1991）[3]は役割行動を①役割交渉の理解、②役割交代の理解、③遊戯活動の範囲の理解の3つの観点から検討を行ったものや加用（2011）[4]によるおにごっこでわざと捕まるといったような違反行動に関する発達段階の違いによる検討を行っているもののほか、松井（2001）[5]や田中（2003）[6]の仲間意識に関する研究など、発達段階における差異について多く検討されているものが多く確認できた。しかしおにごっこ場面における幼児の身体活動や運動能力に着目し、分析した研究は見られない。

### 1.2 子どもの身体活動と運動能力

幼児は遊びを通して、身体運動の発達や認知的な発達、情緒・社会性などの基礎を発達させていく。中村（2003）[7]は幼児における遊びの意義として子どもの生活そのものと示し、さまざまな工夫や遊び仲間とのかかわりの中で行われる学習の場であると示した。

幼児期において子どもの運動能力の向上が求められていることについて、文部科学省（2012）[8]は「動きの多様化」と「動きの洗練化」の二つの

方向性によって、年齢とともに獲得される動きが増大すること、かつそれらの動きがしなやかになっていくことが示され、多様な動きの獲得と目的に合った合理的な動きができるようになることが幼児期の子どもにとって重要であることが示されている。体を動かす遊びでは、特定のスポーツなどの運動を続けるよりも、多様な身体的な動きが含まれている。そのため幼児期の運動能力の向上は幼児の主体性に基づいた遊びが基本である。おにごっこについては、幼児期運動指針によると、「鬼遊びをすると、「歩く、走る、くぐる、よける」などの動きを、夢中になって遊んでいるうちに総合的に経験することになる」と示されており、複数の動きが含まれる遊びであることがうかがえ、幼児期の子どもたちにおいて有効な遊びであると言える。

運動能力の観点においては、幼児を保育する保育者においても、幼児の身体活動に意識を向けることが必要であり、田中（2010）[9]は保育の経験年数に関係なく 9 割以上の保育者がその必要性を意識しているとし、幼児自らの興味関心を前提しつつ、運動能力の向上の観点から、幼児の身体活動を重視していることが明らかになっている。

また田中（2016）[10]は、身体活動量と運動能力の関係について、体力テスト得点で分類した運動能力の高い群と低い群に身体活動量を計測し、質的な側面から運動能力と身体活動の関係についても調査をしている。それによると、運動能力高群・低群ともに、園の一日の生活の中で設定保育時間帯と、午後の自由遊び時間帯に高強度の運動が示されている。これらのことから幼児らは、自らの興味関心や意欲に基づきながら、保育者の的確な援助や保育によって、身体活動が保障されていることがうかがえる。

### 1.3 本研究の目的

これらの先行研究を概観すると、おにごっこによる幼児の発達の特性に関する研究は見られるも

の、幼児が取り組むおにごっこの遊びにおける身体活動や運動能力を調査した研究は少ない。そこで本研究では幼児のおにごっこ場面における身体活動に着目し、おにごっこでの身体活動と幼児の運動能力との関連性を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

データの収集は、宮城県内の A こども園において園庭での自由遊び時間のおにごっこの様子を、タイムサンプリングを用いてビデオカメラで撮影した。撮影した映像データから、おにごっこ中の子どもの走動作に着目し、幼児の運動能力について客観的に評価する。今回の評価の対象は、おにごっこ遊びに参加していた年少児、年中児、年長児の男女の計 8 名について分析を行う。

評価方法については図 1 に示した中村ら（2011）[11]の観察的評価法を用い、対象児の走動作を 5 段階のパターン分類を行い、幼児の運動能力の分析を行う。

また、量的な身体活動の評価方法に表 1 に示した。鈴木ら（2005）[12]による子どもアクティビティ尺度がある。この尺度を用いて、それぞれの対象児の担任保育者に 5 段階評価（1：当てはまらない、2：ほとんど当てはまらない、3：どちらともいえない、4：少し当てはまる、5：当てはまる）を行っていただく。

上記の結果からおにごっこ場面での身体活動と対象児の持つ運動能力の関連性を検討していく。

## 3. 結果

### 3.1 おにごっこ場面での幼児の走動作

自由遊び時間でのおにごっこ場面を撮影した映像データを基に、おにごっこをしている中で、子どもが「逃げる」あるいは「追いかける」場面に着目して、幼児の運動能力について客観的に評価した。分析の結果、おにごっこ場面における幼児の

走動作の運動能力について表2に示す。

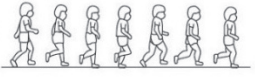
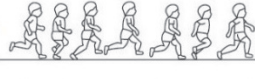



動作カテゴリー	カテゴリー番号	動作パターン	得点(点)
<b>腕の動作</b> 1. 両腕のスウィング動作がない。 2. 前方で腕をかくような動きや、左右の腕のバランスのとれていない消極的なスウィング動作がある。 3. 両肘の屈曲が十分に保持された、大きな振動での両腕のスウィング動作がある。	① 4 7 (10 or 11)13	Pattern1 	1
<b>接地時の足の部位</b> 4. 足の裏全体で接地する。 5. かかとから接地する。 6. 足の裏の外側から接地する。	②(4 or 5)(7 or 8) 11(13 or 14)	Pattern2 	2
<b>離陸時のキック足の動作</b> 7. 膝が屈曲したままであり、主に垂直方向にキックされる。 8. 主に水平方向にキックされるが、十分な膝の伸展はない。 9. 膝が十分に伸展し、水平方向にキックされる。	2(5 or 6) 8 ⑩ 14	Pattern3 	3
<b>滞空前半の空中足の動作</b> 10. 足の蹴り上げはほとんどない。 11. 小さな足の蹴り上げがある。 12. 回復期後半の大腿の引き上げにつながる十分な足の蹴り上げがある。	③ (5 or 6) 8 12 14	Pattern4 	4
<b>滞空後半の空中足の動作</b> 13. 大腿の引き上げはほとんどない。 14. わずかな大腿の引き上げがある。 15. ほぼ地面と水平にまで大腿の引き上げがある。	3 6 ⑩ 12 15	Pattern5 	5

図1 中村ら(2011)[11]による走動作のカテゴリーと動作パターン

表1 鈴木ら(2005)[12]によるアクティビティ尺度

因子	質問項目
プレイ	座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い
	汗をたくさん書いて遊ぶ
	身体を思いっきりよく大胆に動かして遊ぶ
	身体を活発に動かして遊ぶことを好む
	遊具から遊具へ移動して遊ぶ
リーダー	洋服などが汚れることを気にしないで遊ぶ
	遊びの中で友達をリードすることが多い
	遊びの中でいろいろな決断を任されている
チャレンジ	遊びの中で自分の考えやアイデアを試したり提案したりする
	色々な運動遊びに進んで取り組む
	課題を克服する遊びに意欲的に挑戦する
ソーシャル	ルールのある集団遊びや競い合う遊びに積極的に参加する
	友達とかかわって一緒に遊ぶ
	自分から遊びに加わっていきける
	周囲の子をよく見ていて真似して遊ぶ

表 2 おにごっこ場面における幼児の走動作のパターン

対象児	年齢 性別	動作カテゴリー					パターン
		腕 の 動 作	接地時の 足の部位	離陸時の キック脚 の動作	滞空期前半 の空中脚の 動作	滞空期後半 の空中脚の 動作	
A	5歳 男	2	4	8	1 2	1 4	3
B	5歳 男	2	5	8	1 2	1 4	3
C	5歳 女	3	4	8	1 2	1 4	4
D	5歳 女	2	4	8	1 1	1 3	2
E	5歳 女	2	5	8	1 1	1 3	2
F	5歳 女	2	4	8	1 1	1 3	2
G	4歳 女	2	4	8	1 2	1 4	3
H	3歳 女	2	5	8	1 2	1 4	3

分析の結果、自由遊び時間のおにごっこ場面において対象児 8 名の「逃げる」あるいは「追いかける」時の走動作ではパターン 2 からパターン 4 のいずれかに分類され、パターン 1 とパターン 5 に分類される幼児は見られなかった。

腕の振りについては対象児 C を除き、動作カテゴリー 2 に分けられ、肘を軽く曲げ、小さな前後へのスイング動作が多く見られた。接地時の足の部位については、対象児 B・E・H は動作カテゴリー 5 の「かかとから接地」が見られ、対象児 A・C・D・F・G は動作カテゴリー 4 の「足全体で接地」に分けられた。離陸時のキック脚の動作ではすべての対象児が動作カテゴリー 8 の「主に水平方向にキックされるが、十分な膝の伸展はない」に分類された。滞空期前半の空中脚の動作では対象児 A・B・C・G・H は動作カテゴリー 1 2 の「回復期後半の大腿の引き上げにつながる十分な足の蹴り上げがある」と分類され、対象児 D・E・F は動作カテゴリー 1 1 「小さな足の蹴り上げがある」に分類された。滞空期後半の空中脚の動作では、対象児 A・B・C・G・H は動作カテゴリー 1 4 の「わずかな大腿の引き上げがある」と分類され、対象児 D・E・F は動作カテゴリー 1 3 の「大

腿の引き上げはほとんどない」に分類された。

### 3.2 おにごっこ場面での幼児の走動作の考察

おにごっこ場面における走動作の分析では、対象児 C を除いて、パターン 2 かパターン 3 に分類された。中村ら (2011) [11] が実施した幼児の 2.5 メートル走の走動作を分析した研究でも 9 割の幼児がパターン 1 やパターン 2 に分類されており、本研究の対象児の走動作においては発展的段階にあることがうかがえる。

腕の振り方などは前後に小さく振って走る幼児やひじを曲げたまま体の側面に固定して肩をゆるするようなスイング動作をしながら走る幼児も見られた。これは走り方が発達の未熟であることが関連していると思われるが、一方で鬼の接近に驚いたために、回避行動として腕を振らずに逃げる姿や鬼役の子が逃げている相手を捕まえるために手を伸ばしながら走るなどの姿があったため、そのような走り方をしたことが考えられる。

足の蹴り上げについては、鬼として相手を追いかけて接近するためや、鬼から距離をとって逃げていくため断続的に走っていることから、動作に程度の違いはあるものの、すべての対象児で蹴り上

げている姿が見られている。一方で大腿の引き上げについては、大腿がほとんど上がっていない対象児とわずかに上がっている対象児のいずれかに分けられていて、動作カテゴリーにおける大腿の引き上げの十分な発達である地面と水平まで引き上げる姿は見られなかった。

これらの脚の動きについては、走動作の発達の未熟さや走ることの経験なども影響していると考えられる。ただしおにごっこという遊びの特性上、直線的に走るばかりではなく鬼から逃げたり、逃げている相手の動きに対して、瞬時に姿勢や進行方向を変化させたりする必要性があることから、十分な速度を求めるために蹴り上げた足を、素早く自分の体の軸の傍に着いているのではないかと考えられ、おにごっこのもつ遊びの特性が幼児の走り方に影響していると考えられる。

おにごっこは速く走ることやゴールを目指して走る遊びとはその性質が異なり、鬼役と逃げる子の役になり、相手を追いかけたり鬼から捕まらないように逃げたりして走るため、走る軌道が直線だけでなく曲がったり急に反転したりする。またその動作も走動作を含む移動系動作から平衡系動作に変化したり、操作系動作が関連したりして様々な動作が複合的に組み合わさっている。これらのことから、幼児はおにごっこ場面においてはその遊びに適した身体動作をコントロールしていると考えられる。

### 3.3 アクティビティ尺度による幼児の身体活動

それぞれの対象児の担任保育者が5段階評価を行った結果を表3に示す。

表3 アクティビティ尺度による対象児の評価

	評価項目	A男	B男	C子	D子	E子	F子	G子	H子
プレイ	座って遊ぶよりも立って遊ぶことが多い	4	5	4	3	4	3	5	5
	汗をたくさん書いて遊ぶ	5	5	5	4	5	4	5	5
	身体を思いっきりよく大胆に動かして遊ぶ	5	5	5	3	3	2	4	4
	身体を活発に動かして遊ぶことを好む	5	5	5	4	5	2	5	5
	遊具から遊具へ移動して遊ぶ	3	2	3	2	5	3	2	5
	洋服などが汚れることを気にしないで遊ぶ	5	5	1	1	2	2	3	5
リーダー	遊びの中で友達をリードすることが多い	4	4	5	5	4	3	1	3
	遊びの中でいろいろな決断を任されている	4	5	3	3	3	3	1	2
	遊びの中で自分の考えやアイデアを試したり提案したりする	5	3	5	5	5	3	2	3
チャレンジ	色々な運動遊びに進んで取り組む	4	5	5	4	4	2	5	3
	課題を克服する遊びに意欲的に挑戦する	2	5	5	4	5	3	3	2

	ルールのある集団遊びや競い合う遊びに積極的に参加する	5	5	5	3	3	3	5	3
ソーシャル	友達とかかわって一緒に遊ぶ	5	5	5	5	5	4	4	4
	自分から遊びに加わっている	5	5	5	4	4	4	5	3
	周囲の子をよく見ている真似して遊ぶ	4	3	3	3	3	4	5	4

年長女児の C 子・D 子・E 子・F 子の結果を比較したものを、図 2 に示す。走動作パターンが 4 に分類された C 子は「チャレンジ」「ソーシャル」の 카테고리において、走動作パターン 2、3 の幼児よりも高いポイントとなっている。

続いて、走動作がパターン 3 に分類された 5 歳児の A 男・B 男と 4 歳児の G 子、3 歳児の H 子の アクティビティ尺度の比較を行ったものを図 3 に示す。おにごっこ場面で走動作パターン 3 の幼児を比較した結果、男児（A 男・B 男）は女児（G 子・H 子）と比べて、「リーダー」の 카테고리に

おいて、ポイントの平均が高かった。

最後に女児のアクティビティ尺度を比較したものを図 4 に示す。「プレイ」の 카테고리を比較すると、走動作パターン 2 の女児よりもパターン 3、4 に 카테고리された女児のほうがポイントの平均が高かった。また、「リーダー」の 카테고리においては年長児の C 子・D 子・E 子・F 子のポイントの平均が高いポイントを示した。また、「チャレンジ」「ソーシャル」の 카테고리では H 子のポイントが低かった。

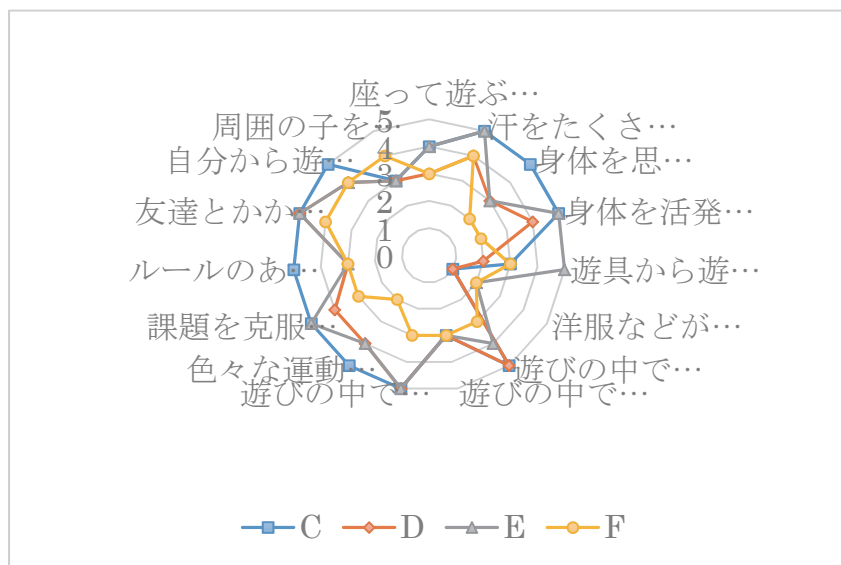


図 2 年長女児のアクティビティ尺度

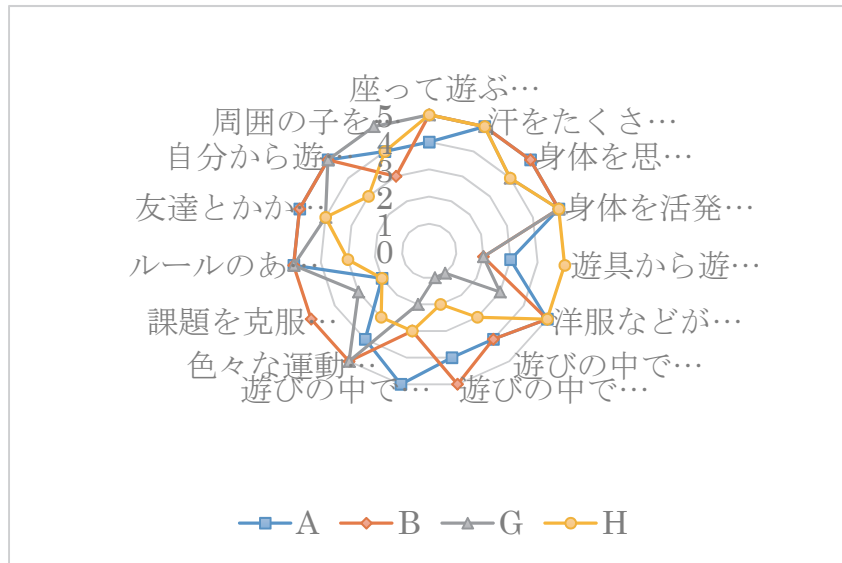


図 3 走動作パターン 3 の男女 (A 男・B 男・G 子・H 子) によるアクティビティ尺度の比較

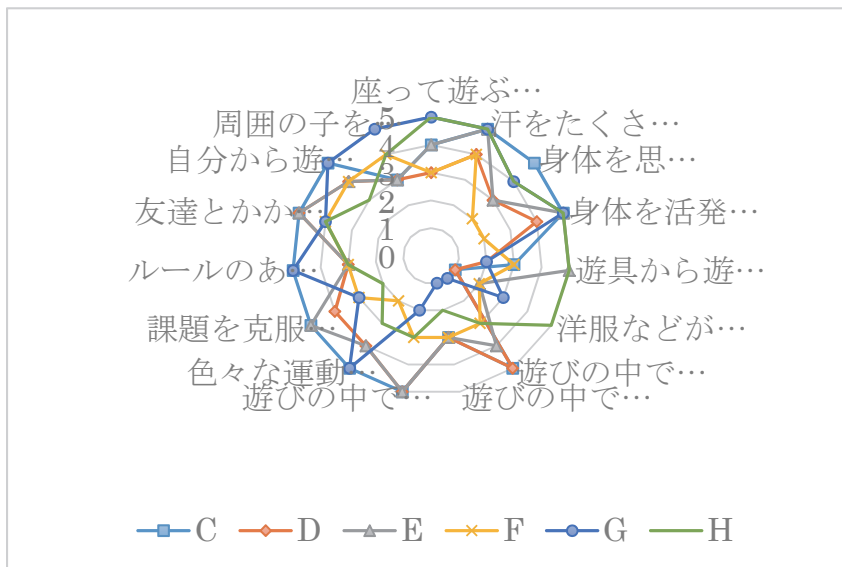


図 4 女児のアクティビティ尺度の比較

### 3.3 アクティビティ尺度による身体活動の考察

図 2 では走動作パターン 4 にカテゴリーされた C 児のアクティビティ尺度の「チャレンジ」のポイントが特に高く示された。これは大人である保育者に挑戦する気持ちがおにごっこ中の走動作に大きくかかわっていると考えられる。また、C 子は、「リーダー」「ソーシャル」のカテゴリーでも高い数値を示した。これはおにごっこ遊びの中で自分だけでなく、仲間と協力しあう社会性や仲間をリードし、まとめるリーダー性が保育者に挑戦する際に身体活動として現れ、運動能力の成長に影響を与えたのではないかと考えられる。

図 3 では走動作パターン 3 にカテゴリーされた子どものうち、年長男子の A 男と B 男の「リーダー」のアクティビティ尺度のポイントが高く表示された。しかし、今回の対象の年長児は全体的に「リーダー」の平均が高く示された。園での生活の中で、責任感や思っていることを言葉にすることができるようになったためではないかと考えられる。これは図 4 でも同様に考えられる。G 子と H 子は走動作パターン 3 に分類されているものの、パターン 2 の D 子、E 子、F 子よりも「リーダー」のポイントの平均が低かった。そのため年中児である G 子と年少児である H 子の走動作

は発達段階にあると考えられる。

#### 4. 総合考察

同じ動作カテゴリーに分類されていてもアクティビティ尺度による身体活動のポイントに差があることについては、コーディネーション能力が影響していると考えられる。コーディネーション能力とは、随意運動を、目的に合わせて調整することができるようになるための能力であり、具体的には①物や人等の位置関係を把握する能力である「定位能力」②手や足、道具等を扱う能力である「識別能力」、③合図等に対して素早く反応する能力である「反応能力」、④状況に応じて適切に対処する能力である「変換能力」、⑤身体を無駄なくスムーズに動かす能力である「連結能力」、⑥動作のタイミング等をうまく合わせられる「リズム能力」、⑦崩れた体制でもバランスを上手に保てる「バランス能力」の7つがある。おにごっこにおいては走動作を中心にしながら手や腕の操作系動作や体の反転や回転などの平衡系動作が連動し合い、さまざまな動作が複合的に含まれていることが考えられ、身体のコーディネーション能力の成長に寄与していることが考えられる。幼児期は自身の筋運動を関連する神経系の成長が著しい時期であり（山田ら 2004）[13]、幼児期のおにごっこから多様な動きを経験することは、コーディネーション能力を向上させることにつながる。

一方で幼児は、コーディネーション能力を基盤にしておにごっこの遊びの中で、自らの身体動作をコントロールして、状況に応じた適切な動きをしていると考えることができる。これらはすなわち、遊びの中で自らの身体動作を応用的に活用していると考えことができ、遊びの状況やその空間、人的や物的の環境に応じて動作を変容させながら遊んでいると考えることができる。

#### 参考文献

[1] 富田昌平：鬼ごっこ・ルール遊びの展開における保育者の指導・援助-自由記述の分析をも

とに―，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，第35号，pp.19-26（2015）

[2] 田中浩司：幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達，発達心理学研究，第16巻，第2号，pp.185-192（2005）

[3] 田丸尚美：幼児の遊びにおける役割関係の理解-鬼ごっこ場面の発達の検討-，教育心理学研究，第39巻，第3号，pp.341-347（1991）

[4] 加用文男：鬼ごっこ・隠れんぼにおける「わざと捕まる」違反行動の発達の残存性，京都教育大学紀要，第119巻，pp.87-98（2011）

[5] 松井愛奈：幼児のなかへの働きかけと遊び場面との関連，教育心理学研究，第49巻，pp.285-294（2001）

[6] 田中浩司：幼児期の鬼ごっこ遊びに見られる「隠れる」行為と仲間への意識，日本保育学会大会発表論文集，第56巻，pp.722-723（2003）

[7] 中村和彦：子どもにとっての遊びの意義―特に運動特性に着目して―，子どもと発育発達第1号，pp.123-125（2003）

[8] 文部科学省：幼児期運動指針（2012）

[9] 田中沙織：幼児の身体活動に対する保育者の意識に関する研究，広島大学大学院教育学研究科紀要，第3部，第59号，pp.161-166（2010）

[10] 田中沙織：4・5歳児の身体活動と運動能力差との関連―幼児における身体活動の実態把握に向けて―，広島女学院大学人間生活学部紀要，第3号，pp.69-75（2016）

[11] 中村和彦，武長理栄，川路昌寛，川添公仁，篠原俊明，山本敏之，山縣然太朗，宮丸凱史：観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達，発育発達研究，第51号，pp.1-18（2011）

[12] 鈴木裕子，鈴木英樹，上地広昭：幼児の身体活動評価尺度の開発：子どもアクティビティ尺度体育学研究，第50巻，pp.557-568（2005）

[13] 山田洋，長堂益丈，塩崎知美，横井孝志：表面筋電図による幼児の運動機能の評価，東海大学紀要，第33号，pp.21-28，（2004）